

山根 寛 (著)

精神障害と作業療法 新版

—病いを生きる, 病いと生きる 精神認知系作業療法の理論と実践

鎌倉 矩子

(広島大学・国際医療福祉大学名誉教授, 作業療法士)



本書の著者山根は, 大学時代に当事者運動の支援にかかわり, その後, その先をたどるかのようにOTになった人である。氏が臨床家としての活動を始めたのは1982年(昭和57年)であるが, 当時わが国の精神障害作業療法はあらゆる意味で混沌としていた。それから30年あまり, 大学教員としての定年を迎える日まで, 氏はひたすらにこの道を走り続けてきたのであるが, その間に培った作業療法哲学を一冊に注ぎ入れて生まれたのが本書である。したがってこれは, 山根が次世代のOTに贈る, 指南書にして引き継ぎの書である。

内容は周到に構成されている。

最初に, 病い・障害をどうとらえるべきか, またわが国の精神障害作業療法がどのような歴史をたどってきたかが説かれる。次に人にとっての「作業」の意義と, 「作業」を療法として用いることの意義が説かれる。これに続くのは, 作業療法を構成する諸要素, すなわち「対象者」, 「作業」, 「作業療法士」, 「場」のそれぞれの種類と特性の記述であり, またそれらの配置および相互ダイナミクスを治療に用いることの効用である。次に作業療法実践の手順の提示があり, 次いで, 対象者の属性, つまり病期, 疾患, 環境, 個人履歴等々の違いについて, OTがどのよう

な対応をすべきかが説かれる。作業を使うけれども作業療法ではない諸々の療法についても解説があり, それによって作業療法の本質をより明確にする試みがなされている。一貫しているのは, 「作業」と「作業の場」を使うことが, 必ずや「対象者」の生活再建を助ける, という確信である。

作業療法は多要素的であるとともに, 可変的かつ継続的に適用されるという特質をもつ。このことを第三者に説明するのはなかなか難しいものであるが, 著者はこれを, 「作業療法はシステム・プログラムである」と明快に説く。なるほど, 的確である。

「対象者」と「作業」に対する著者のまなざしは深い。

作業場面においてOTは, 人と人, 人と物の距離を常に計らなくてはならないが, それは物理的距離と心理的距離が平行関係にあるからだという。ある種の患者に対する「パラレルな場」の勧めはそこからくる。作業の効用の一つに「病者を護る」がある, とも彼はいう。一見, 精神障害領域ならではの指摘だが, よく考えればどの領域にもあてはまることだ。

作業の「身体性」への着目の仕方も, この著者ならではのものであろう。それは, 病者の自我を確立するための, あるいは生活の自律を学ぶための, その他もろもろ

の, 欠かせない要素であるのだと。作業の選択に関しても, 時にはOTが「選択の責任」を引き受けねばならないことがあるとして, 画一的な患者中心主義を退けている。この他たくさんの説得力ある教示があるのだが, ここでは割愛するとして。

山根は, おそらく出発時点において, 力動精神医学の影響を受けている。だがその後, 日本の精神医療界にも, 地域精神医療やリハの考え方が取り入れられる時代が訪れた。作業療法の世界においても, 医科学的価値観を離れて, 作業行動学や作業科学を創出する動きが起こった。山根は, それらすべてを咀嚼しつつも, 自分が対象者との出会いの中で見届けたこと, 感じたことを第一の根拠として考える姿勢を崩さなかった。本書が, そうした経験に基づいて書かれていることは明らかである。

なお本書は理論書なので, もう少しリアルなイメージがほしいと感じる読者がいるかもしれない。そんな人には, この著者の手になる症例報告(雑誌論文)や, それらを収載した著書を読むことをお勧めする。本書の言わんとするところが一層よく理解されると思う。

〔 B5判 414頁 4,000円+税 〕
三輪書店 刊
☎ 03-6801-8357